

富士山静岡交響楽団

# 第117回定期演奏会

静岡公演

2023.3.4 土

開場 / 13:00

開演 / 14:00

静岡市清水文化会館  
マリナート 大ホール

浜松公演

2023.3.5 日

開場 / 13:00

開演 / 14:00

アクトシティ浜松  
中ホール

主催：公益財団法人富士山静岡交響楽団  
共催：公益財団法人浜松市文化振興財団(浜松公演)  
後援：静岡県、静岡市(静岡公演)、浜松市(浜松公演)  
助成：



文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会

広報協力：静響を応援する会

協力：



特別協力：



ON  
STAGE  
SHIZUOKA

## 武満 徹：弦楽オーケストラのための「3つの映画音楽」

Toru Takemitsu : Three Film Scores for String Orchestra

- |                         |  |
|-------------------------|--|
| I 「訓練と休息の音楽」『ホゼー・トレス』より | José Torres : Music of Training and Rest |
| II 「葬送の音楽」『黒い雨』より       | Black Rain : Funeral Music               |
| III 「ワルツ」『他人の顔』より       | Face of Another : Waltz                  |

## プロコフィエフ：ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調 op.63

Sergei Prokofiev : Violin Concerto No. 2 in G Minor, op. 63

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| I アレグロ・モデラート      | Allegro moderato     |
| II アンダンテ・アッサイ     | Andante assai        |
| III アレグロ・ベン・マルカート | Allegro, ben marcato |

## 休憩 Intermission

## ドヴォルザーク：交響曲 第6番 ニ長調 op.60 B.112

Antonín Dvořák : Symphony No. 6 in D Major, op. 60, B.112

- |                      |                             |
|----------------------|-----------------------------|
| I アレグロ・ノン・タント        | Allegro non tanto           |
| II アダージョ             | Adagio                      |
| III スケルツォ、フリアント、プレスト | Scherzo, Furiant, Presto    |
| IV アレグロ・コン・スピリート     | Finale: Allegro con spirito |



- |                   |                                 |
|-------------------|---------------------------------|
| 指揮：高関 健           | Ken Takaseki, conductor         |
| ヴァイオリン：ティモシー・チューイ | Timothy Chooi, violin           |
| 管弦楽：富士山静岡交響楽団     | Mt. Fuji Philharmonic Orchestra |

## 76.9FM.Hi! FM-Hi!「静響コンサート」

毎月第2日曜 10:00~11:30 / 再放送 第3土曜 24:00 ~ 25:30 ON AIR

静岡公演の様様は――

4月9日(日)10:00 ~ / 再放送 4月15日(土)24:00~ 放送予定

## 高関 健 | 指揮 |

Ken Takaseki, conductor

国内主要オーケストラで重職を歴任。サンクトペテルブルグ・フィル定期演奏会で聴衆や楽員から大絶賛を受けるなど海外への客演も多く、マイスキー、パールマン、クレメル、ブーレーズ等の世界的ソリストや作曲家、特にアルゲリッチからは3回の共演を通じてその演奏を絶賛されるなど絶大な信頼を得る、緻密なスコア分析からスケールの大きな音楽を作りだすまさに“名匠”。オペラでも好評を博し、最近では国立劇場で團伊玖磨の「夕鶴」、ストラヴィンスキー「夜鳴きうぐいす」、チャイコフスキー「イオランタ」、また2019年にはウラジオストクとサンクトペテルブルグでも「夕鶴」を指揮、作品の魅力を存分に伝えて高い評価を得ている。現在東京シティ・フィル常任指揮者、仙台フィルレジデント・コンダクター（2023年4月から常任指揮者）、東京藝術大学指揮科教授。2021年4月富士山静岡交響楽団首席指揮者に就任。NHK等の番組にも定期的に出演するなど、幅広い活躍を続けている。1977年カラヤン指揮者コンクールジャパン、1984年ハンス・スワロフスキー国際指揮者コンクール優勝。渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、サントリー音楽賞を受賞。  
twitter.com/KenTakaseki



©K.Miura

## ティモシー・チューイ | ヴァイオリン |

Timothy Chooi, violin

1993年生まれ。カーティス音楽院でアイダ・カヴァフィアンとパメラ・フランクに、ジュリアード音楽院でキャサリン・チョーに、クロンベルク・アカデミーでクリスティアン・テツラフに師事、情熱的な演奏と幅広いレパートリーで世界的な支持を集めている。

2015年マイケル・ヒル国際ヴァイオリン・コンクール（ニュージーランド）銅メダル、2018年ハノーファー・ヨーゼフ・ヨアヒム国際ヴァイオリン・コンクール優勝、2019年エリザベート王妃国際音楽コンクール2位などで入賞。また、ヴェルビエ音楽祭で有望な若手演奏家に贈られる Prix Yves Paternot を受賞した。

近年、ソリストとして共演したオーケストラには、ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団、シカゴ交響楽団、ロシア・ナショナル管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、モントリオール交響楽団、ルクセンブルク室内管弦楽団、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー管弦楽団、トロント交響楽団がある。



©Den Sweeney

音楽を通じた社会活動にも積極的であり、2020年音楽教育とコミュニティアウトリーチ活動でロバート・シャーマン賞を受賞した。

使用楽器は日本音楽財団保有のストラディヴァリウス1709年製ヴァイオリン「エングルマン」。

#### ■ストラディヴァリウス1709年製ヴァイオリン「エングルマン」

このヴァイオリンは、アメリカ海軍士官ヤング中佐が第二次世界大戦中に戦死するまで、約150年間ヤング家に大切に保管されていたため、保存状態が優れている。当財団が保有する以前は、アメリカのアマチュア・ヴァイオリン奏者で収集家のエフレイム・エングルマンが所有していたため、現在はこの名前で親しまれている。

## 富士山静岡交響楽団 | 管弦楽 |

### Mt. Fuji Philharmonic Orchestra

2020年11月、いずれもNPO法人であった静岡交響楽団（創立1988年）と浜松フィルハーモニー管弦楽団（創立1998年）が合体し、2021年4月より一般財団法人「富士山静岡交響楽団」として県下全域に密着した演奏活動を継続、2022年4月より公益財団法人の認可を受け、財政基盤の強化と更なる演奏力の向上に向けて大きく前進を続けている。

県内唯一の常設プロオーケストラとして、定期演奏会、企業協賛特別演奏会を始め、まちかどコンサート、病院、老人福祉施設、こども園などへのアウトリーチ、また学校向けの鑑賞教室など、大小合わせた演奏会は年間150回を数え、名実ともに静岡県を代表するオーケストラとして地域の音楽文化の普及と向上に貢献している。

## 日本音楽財団

日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として、弦楽器名器の貸与事業を行っています。保有する世界最高クラスの弦楽器を21挺（ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、グアルネリ・デル・ジェス製ヴァイオリン2挺）を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っています。また、楽器被貸与者による演奏会を日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されています。

解説：寺西基之（音楽評論家）

## 武満徹 弦楽オーケストラのための「3つの映画音楽」

日本が生んだ国際的な作曲家である武満徹（1930–96）はごく若い時期に短期間だけ清瀬保二に師事したほかは、独学で作曲を勉強した。既存の技法や語法に縛られることなく鋭敏な感性によって独自の響きの世界を求めていった彼は、20世紀後半の世界の音楽界に多大な影響を与えた作曲家だった。

彼はまたシリアスな作品の一方で、映画音楽、テレビやラジオのドラマのための音楽、ドキュメンタリーのための音楽も多数手掛けている。本日の『3つの映画音楽』は自身が作曲した映画音楽の中から3曲選び、1994年から95年にかけて改めて弦楽合奏用に編曲して演奏会用の作品としたものである。

### 【第1曲】 「訓練と休息の音楽」

黒人ボクサーの日々を追った勅使河原宏監督のドキュメンタリー映画『ホゼー・トレス』（1959）のための音楽。ブルース風の語法が生かされている。

### 【第2曲】 「葬送の音楽」

原爆がもたらした悲劇を描いた井伏鱒二の小説『黒い雨』を原作とする今村昌平監督の同名の映画（1989）のために書かれた音楽で、悲しい情感のうねりでゆっくり運ばれるエレジーである。

### 【第3曲】 「ワルツ」

安部公房原作・脚本、勅使河原宏監督の映画『他人の顔』（1966）のための音楽。火傷で顔を潰した男に医者が別の顔の仮面を与え、顔の変わったその男の行動とそれを操る者を巡っての不条理な世界を描いた映画で、この「ワルツ」は20世紀前半のドイツの作曲家クルト・ヴァイルの様式を借りたドイツ風の暗いワルツとなっている。

## プロコフィエフ ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調 op.63

ロシアの作曲家セルゲイ・プロコフィエフ（1891–1953）は1919年、ロシア革命の混乱を避けて母国ロシアを去ってアメリカに移り、その後はヨーロッパで活動を続けた。しかし母国への思いが次第に募り、1930年代前半にソヴィエト政

権下となっていた故国とヨーロッパとの間を行き来しながら帰国の準備を図り、1936年に完全復帰を果たす。

このヴァイオリン協奏曲第2番は母国に完全復帰する1935年の所産で、フランスのヴァイオリン奏者ロベール・ソータンの依頼で作曲され、同年12月に彼の独奏によってマドリッドで初演された。伝統的な3楽章構成と古典的形式、民族的な性格を持つ主題など、プロコフィエフの特質である明快な古典性の中に、これもまた彼の特質である鋭くモダンな音感覚や諧謔性が打ち出された作品である。この協奏曲はアメリカで活躍していた稀代の名手ヤッシャ・ハイフェッツが好んで演奏し、それによってほどなく世界的に広く知られるようになった。

#### 【第1楽章】 アレグロ・モデラート

独奏ヴァイオリンのみの第1主題に始まるソナタ形式。主題は叙情的ながら、そこに鋭角的な響きが入り混じり、屈折した表情を見せる。

#### 【第2楽章】 アンダンテ・アッサイ

プロコフィエフの叙情的な面が発揮された美しい主題を持つ緩徐楽章で、気分の変化に富む。

#### 【第3楽章】 アレグロ・ベン・マルカート

民俗舞曲風の主題を軸にした躍動的なロンドで、ダイナミックな力動性、特徴的なリズム、拍子の交替、打楽器の活用などが結び付いて、鮮やかな盛り上がりを作り上げていく。

## ドヴォルザーク 交響曲 第6番 ニ長調 op.60 B.112

19世紀半ばのヨーロッパでは自国の特色を打ち出した民族主義的な芸術音楽を創造しようという動きが生れた。いわゆる国民楽派の運動である。ボヘミア（チェコ）においてそうした国民楽派の動きを確立したのはスメタナだったが、それに続く世代の大作曲家がアントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）であった。先輩スメタナが民族的な題材によるオペラや標題音楽で具象的に国民的主張を表現したのに対して、ドヴォルザークは（もちろん民族的題材によるオペラや管弦楽作品も多数書いているが）交響曲や室内楽曲などヨーロッパ本流の伝統的・普遍的な古典様式のジャンルも重んじ、伝統様式のうちにボヘミアの民族色を盛り込

むやり方で民族的な作風を打ち出した作曲家だった。

特にドヴォルザークは創作人生の中期において、伝統的なスタイルの中にボヘミアやスラヴの民謡や民俗舞曲の要素を旋律やリズムを取り入れることで、民族主義的な色彩を鮮明に打ち出すようになった。しばしば“ドヴォルザークのスラヴ時代”ともいわれているこの時期の彼の作品は、ボヘミアやスラヴの民俗音楽の特徴を積極的に取り入れた民族色濃厚な作風が特徴となっている。

そうした彼の“スラヴ時代”を締め括る作品のひとつが1880年に書かれた交響曲第6番である。スタイルの点では伝統に連なる明快な4楽章構成をとり、その中に民俗音楽の特徴を織り込んでボヘミア的情緒や民族感情をストレートに表し出した作品で（特にボヘミアの熱情的な農民舞曲フリアントの様式を交響曲では初めて採用している）、そうした民族表現を伝統的な交響曲の形式に見事に調和させている点に、ドヴォルザークの成熟した筆遣いが見てとれるといえよう。初演は1881年3月25日プラハにおいてアドルフ・チェフの指揮でなされた。この交響曲は時をおかずロンドンやニューヨークでも取り上げられ、ドイツの名指揮者ハンス・リヒターもこの曲を高く評価してロンドンで指揮している。伝統様式の中にボヘミア色を織り込むドヴォルザークの民族主義の道が広く国際的に受け入れられたことの現れといえよう。

**【第1楽章】 アレグロ・ノン・タント**

ソナタ形式をとり、冒頭の第1主題からしてボヘミアの田園風景が目の前に広がるかのようだ。全体の明るい情感の中に織り込まれる陰りなど、表情の変化に富んでいる。

**【第2楽章】 アダージョ**

夢見るような夜想曲風の雰囲気漂う美しい緩徐楽章。それだけに中ほどで一瞬悲劇的な響きが現れるのが効果的だ。

**【第3楽章】 スケルツォ、フリアント、プレスト**

ボヘミアの民俗舞曲フリアントの様式による活気に満ちたスケルツォで、土の香りが感じられよう。牧歌的な中間部も魅力的。

**【第4楽章】 アレグロ・コン・スピーリト**

喜ばしさの迸り出るようなソナタ形式のフィナーレで、最後は熱氣溢れるコーダに至る。

## 富士山静岡交響楽団

### ゲストソロコンサートマスター

藤原浜雄

### ゲストコンサートマスター

大森潤子

### 1st ヴァイオリン

山村妙子

増田訓子

舟山 奏

小川亜希子

対馬裕美

岡田恵里

• 荒巻理恵

• 松澤 舞

• 福田貴子

• 加藤綺乃

### 2nd ヴァイオリン

◎平尾真伸

加藤悠希

近藤由理

有吉幸乃

三浦文路

井柳葉月

酒井静香

山本実希

中山智子

• 岩切雅彦

### ヴィオラ

○川口さくら

鈴木香奈江

山崎優樹

寺田さくら

• 中村紀代子

• 三上賢一

• 佐藤裕子

• 柿本朱美

### チェロ

◎三宅 進

土山如之

生駒宗煌

鈴木穂波

• 青木祐介

• 渡邊弾楽

• 白井 彩

### コントラバス

○中村文音

山西貴久

清 祐介

方壁さをり

• 鈴木 智

• 長谷川信久

### フルート

井畑志保

上田恭子

中嶋めぐみ

### オーボエ

篠原拓也

高橋早紀

### クラリネット

渡辺繁弥

塚本陽子

### ファゴット

岡本あけみ

東 実奈

### ホルン

• 鎌田溪志

• 岡田彩愛

阿部華苗

森田めぐみ

### トランペット

• 佐藤成美

• 川村 大

### トロンボーン

中川亜美

鶴田 陸

### バストロンボーン

星野和音

### チューバ

• 小嶺たか代

### ティンパニ

久保 創

### パーカッション

山西由里

山田祐将

◎=ゲスト首席

○=楽員首席

•=客演

### 評議員及び役員

#### ◆ 評議員

鬼頭 宏

鈴木壽美子

晝馬日出男

岩野裕一

岡部比呂男

#### ◆ 理事長

岩崎清悟

#### ◆ 専務理事

宮澤敏夫

#### ◆ 理事

足羽由美子

伊藤洋一郎

大石 剛

大村祐太

小田寛人

酒井公夫

高橋明彦

戸崎文葉

戸野谷 宏

中西卓也

中西勝則

仲野哲央

西 信之

藤田綾子

村松尋代

山田潤一

前田 衛

#### ◆ 監事

田形和幸

豊島勝一郎

### 事務局

#### ◆ 顧問

滝口 洋

塩澤 諭

小楠元廣

#### ◆ 専務理事

宮澤敏夫

#### ◆ 事務局長

前田 衛

#### ◆ 事務局次長

川村昌史

小林昌史

#### ◆ 総務

松浦悦子

#### ◆ 事業

中田 健

#### ◆ 広報推進

望月由美

#### ◆ ステージマネージャー

青木裕汰

#### ◆ ライブラリアン

岡村 愛